Nagano Prefectural Museum of History

長野県立歴史館たより

2016年 春号 vol.86

特集 長野県の遺跡発掘2016

土　偶
（縄文時代、栄村 ひんご遺跡出土）

信州学の知の拠点を目指して

平成6年(1994)11月、千曲市に開館した本歴史館は、歴史博物館的機能を担う総合情報部門、埋蔵文化財に関わる業務を担う考古資料部門、公文書館機能を担う文献史料部門を併せ持つ複合施設として、県民共有の財産である歴史資料や考古資料などを積極的に活用・公開し、利用者の知的関心、学習意欲の高まりに、歴史・文化の視点に立った展示等をとおして学んで頂ける場を目指してまいりました。

一方、全県的な視野での調査・研究、情報提供の充実、立地面に起因する利用者の地域的な偏りなどの課題もあります。こうした課題の解消に向け、地域の歴史・文化に関する共同研究、県内博物館との連携、企画展・館蔵品展の巡回開催、各地での講演会・講座の開催など「信州の学の拠点」の一翼を担うべく新たな取り組みを進めております。

ここで、平成28年度の展示を紹介します。

春3月からは、「長野県の遺跡発掘2016」が始まります。県内には数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、毎年各地で発掘調査が行われています。出土品はいずれも地域の歴史を語るうえで欠かせない資料です。これらを広く公開し、遺跡を身近に感じていただき、埋蔵文化財への理解が深まればと期待しています。今年は、新たに佐久会場(佐久市立近代美術館)を加え、本館を含め県内4会場で巡回展示を行います。

夏7月からは、鉄道を取り上げます。北陸新幹線の金沢延伸やリニア中央新幹線の着工など新たな鉄道交通網の整備に県民の期待が集まっていますが、一方で、信州には廃線となった路線もあります。失われた鉄路を取り上げ、鉄道の果たしてきた役割を紹介します。

秋9月からは、木曽地域に伝わる文化財を一堂に紹介します。木曽は、人や物が行き交うなかで豊潤で独創的な文化を育んだ地です。古代、中世はもとより、現在まで続く木曽の文化を紹介します。木曽復興の応援の一助になればと考えています。

冬12月からは、江戸時代の城郭や城下町を取り上げます。県内にある城郭や城下町は、その多くが街づくりのシンボルとなっています。近年、近世城郭や城下町遺跡の発掘も相次ぎ、文献に記されなかった城郭・城下町の姿が明らかになってきています。この展示は、全県的な視野での調査、研究、情報提供の充実に向けた取り組みのひとつです。市町村教育委員会の協力を得て、江戸時代における城郭・城下町の最新の発掘調査の成果を紹介します。また、この展示は県内を巡回し、本館までおいで頂けない地域の皆さまにもご覧頂きたいと考えております。

絶えず、最新の調査・研究成果を展示や講演会等に反映させ、新しい情報の発信に努め、展示等をとおして新たな価値観や未来像を提供するとともに、講演会の県内巡回開催や公民館等での出前講座など、歴史館がより身近なものになるよう努めてまいります。

歴史を学ぶとは、単に過去を振り返ることではなく、現代を考え、未知のものへの理解を深めることだと言われています。歴史を正しく継承し、未来に伝えていくことが県立歴史館の大きな役割と考えています。

秋季企画展「樹木と人の交渉史」展示解説のようす

秋季企画展「樹木と人の交渉史」を振り返って

3万年にわたる樹木とのかかわりあいを展示

平成27年10月3日（土）から11月29日（日）まで、遺跡から出土した木製品を中心に企画展を開催し、6,540名の方にご覧いただきました。

展示では、気候変動による樹木の変化にあわせ、人が生活スタイルを変えてきたこと、逆に、人の活動が、樹木や森林に大きな影響を与えてきた歴史をテーマとしました。

観覧者の傾向をみると、考古資料に興味をお持ちの方のほか、植生の変遷と人との関係を知りたいという林業関係者、漆工芸に関心をお持ちの木工関係者、地球温暖化と森林の関係についてヒントを得たいという方、円空仏の愛好者など、さまざまな動機の方がおみえでした。その中には「はじめて来館した」「はじめて講座を聴いた」という方も多くおられました。

樹を知り、木で作る体験イベントの開催

講座・イベントでは、講師と対話をしながら樹木や木材に触れる「柿板（こけら）」の実演製作、その板を使う「木簡作り」「樹木観察会とクラフト作り」「リース作り」をおこないました。期間最後のイベントではリピーターが多く集まり、一度参加すると二度来たくなるイベントとなりました。

リース作りイベントの作品、テーマは「樹木と人」

歴史のこみち（中庭）・常設展示への誘い

展示に関連してエントランスホールから中庭の眺望を良くし、ベンチを置きました。正面には縄文時代のドングリの森が見えます（下写真）。奥には古代～近世の有用樹が広がり、さらに敷地外は現代の里山につながっています。今後も、ベンチに腰をかけてゆっくりと中庭の樹木をご覧ください。

企画展では縄文時代のクリ・ウルシ、奈良時代のサワラ、江戸時代のマツに絞って資料を展示しました。個別資料ではなく、樹木のある景観や生活に伴う木製品の豊富さなど、「木の文化」の概要は常設展示室で再現されています。

樹木に着目して常設展をご覧いただくと、これまでとはひと味違った「信濃国＝木の国・木の文化」を発見できると思います。企画展を見逃した方、ぜひ常設展示室へお越しください。

エントランスホールから見た「歴史のこみち」（中庭）の樹木

「長野県の遺跡発掘2016」

会期：平成28年3月12日（土）～6月26日（日）　展示会場：長野県立歴史館　企画展示室

本県には、約15,000カ所の遺跡があり、毎年350件あまりの発掘調査が県内各地で行われています。

今回の展示では、平成27年に発掘調査された最新の出土品、近年発掘された遺跡や報告書が刊行された遺跡の資料を中心に展示します。展示資料はいずれも地域の歴史を語る上で欠かせない資料です。これらを多くの方々に公開することで、遺跡を身近に感じていただくとともに、埋蔵文化財保護へのご理解とご協力を得ることを目的としております。

多くの県民の皆さまにみていただくために、展示は当館のほか、長野県伊那文化会館、安曇野市豊科郷土博物館、佐久市立近代美術館で巡回展示を行います。

【長野県埋蔵文化財センターの発掘成果から】

栄村初の本格的発掘調査

栄村ひんご遺跡は、標高284ｍ前後の千曲川左岸の河岸段丘上、新潟県境まであと４㎞という場所にあります。

発掘調査では、今から約3,500年前、縄文時代後期の住居跡21軒や多数の穴がみつかりました。住居跡のうち3軒は、床面に石が敷かれている敷石（しきいし）住居でした。入口が少し張り出しており、住居跡を上から見た形が、手鏡に似ていることから「柄鏡（えかがみ）形敷石住居」と呼ばれているものです。一般的な敷石住居では、鉄平石（てつべいせき）などの平たく角ばった石を使いますが、ひんご遺跡では、平たく円い川原石が用いられています。

柄鏡形敷石住居跡（点線）
（長野県埋蔵文化財センター提供）

また、この時期の縄文土器も大量に出土し、中には土偶も数点ありました。土偶は、頭部、腕、足などの破片で、すべてこわれた状態でみつかっています。

みつかった土偶の顔（長野県埋蔵文化財センター提供）

みつかった顔は、鼻の下が長い特徴的な顔をしています。誰かに似せてつくったのでしょうか。

この調査は、縄文時代の遺跡では栄村で初めての本格的な発掘調査となりました。村の歴史をひも解く上で、貴重な例になると考えられます。

【県内市町村教育委員会の発掘成果から】

弥生時代における北陸との交流をしめす土器

長野女子高校校庭遺跡は、校舎建て替えに伴い長野市埋蔵文化財センターが調査しました。

遺跡周辺は、現在住宅密集地ですが、過去の調査で弥生時代から古墳時代、さらに平安時代にかけての大集落であったことがわかっています。

今回の調査でも、弥生時代後期の竪穴住居跡26軒、古墳時代の住居跡19軒がみつかり、大きな集落が広がっていたことが分かりました。

特に注目されるのは、弥生時代後期の集落から

みつかった北陸地方の特徴をもった土器です。この土器には、そのつくられた土の違いから、北陸地方から持ち込まれた土器と、その特徴をまねて地元で作られた土器の2種類があるようです。

出土した住居跡からは、この時代に善光寺平

北陸地方から持ち込まれた土器（長野市埋蔵文化財センター提供）

をはじめとする千曲川流域に広く分布した箱清水式土器という地元ならではの赤い土器もみつかっています。

当時の人びとが、地元の文化に新しい文化を取り入れながら日々の生活を送っていた様子がうかがえます。

新幹線開通で話題になった北陸地方との関係ですが、その交流ははるか昔から続いていました。

〈テーマ展示〉　土偶

近年、茅野市中ッ原遺跡出土の「仮面の女神」など、県内出土土偶が相次いで国宝や重要文化財に指定され注目されています。

長野県ではこれまで約2,000点以上の土偶がみつかっており、その数は全国有数です。これは、長野県が縄文文化繁栄の地であったことを物語っています。

最近でも、先に紹介したひんご遺跡のように、新たな土偶の出土や土偶が出土した遺跡の報告書が刊行され、その数はますます増加しています。今回の企画展では、その土偶に注目しました。

土偶は、縄文時代中期から多くつくられるようになり、その後一時期少なくなりますが、縄文後期から晩期にかけてまた多くなります。

千曲川の堤防工事に伴い調査された中野市千田遺跡からは、中期の土偶200点以上が出土しました。松本市のエリ穴遺跡からは、後期・晩期の土偶が300点以上出土しています。ともにその時期としては県内最多の出土数です。

千田遺跡
縄文時代中期土偶
（中野市立博物館蔵）

今回は顔を中心に展示します。つくられた時期や地域によって違いがあるのか、作り方に特徴があるのか等、ご自分の観点でご覧頂くと展示がより楽しめると思います。ぜひ、お越しください。

≪関連行事≫

【講演会・遺跡報告会】
会場：歴史館講堂
日時：4月23日（土）13:30 ～ 15:40
〈遺跡報告会〉　13:30 ～ 14:30
「長野女子高校校庭遺跡」（長野市埋文ｾﾝﾀｰ調査）
「栄村ひんご遺跡」（長野県埋文ｾﾝﾀｰ調査）
　報告者：各遺跡発掘担当者
〈講演会〉　14:40 ～ 15:40
講師：三上　徹也　氏（長野県考古学会員）
演題：「土偶ってなんだろう？」
※聴講には入館料が必要です。

◇お知らせ◇

この企画展は、下記の通り巡回します。

７月９日～８月21日　長野県伊那文化会館
９月３日～10月16日　安曇野市豊科郷土博物館
10月29日～11月13日　佐久市立近代美術館

考古資料をよむ

黒曜石産地推定分析から何がわかるか

黒曜石の産地推定分析

火山の噴火によって生成される黒曜石は、産地が限定されます。特に信州産黒曜石は古くから着目されおり、大正時代に刊行された『諏訪史第一巻』でも諏訪を中心とした黒曜石の分布想定図が示され、先史時代の交易を探る手段としました。

また黒曜石は産地が理化学的に推定できるという利点があります。噴出源によって異なるマグマの成分の差から産地を推定する「熱中性子放射化分析」と「蛍光（けいこう）X線分析」です。日本でのこの分析は1970年代から行われるようになりました。前者が試料を一部破壊して分析するのに対して、後者は非破壊で分析結果が得られるため、1990年代には池谷信之・望月明彦氏らによって遺跡内における黒曜石全点分析を行い、一時期に各産地から黒曜石がもたらされていることが明らかになりました。

励起X線を黒曜石に照射し、黒曜石から放射される蛍光X線の光の長さを測定して元素の成分比を調べ、産地を推定します。（長和町黒曜石体験ミュージアム提供）

長野県外産の黒曜石が持ち込まれていた

長野県埋蔵文化財センターが信濃町野尻湖周辺で高速道建設等に伴う発掘調査によって出土した旧石器時代資料のうち分析可能な15,000点余の産地分析を行いました。そのほとんどが野尻湖から南へ80kmの信州黒曜石原産地からもたらされたものでしたが、0.1％にあたる17点は信州以外に産地がある黒曜石でした。

なかでも200km以上離れた青森県の日本海沿岸部に産出地をもつ深浦（ふかうら）産黒曜石が含まれていました。それは北方系の技術的な特徴をもつ細（さい）石核（せっかく）と呼ばれる石器を作る素材の石塊でした。これらの石器を検討した谷和隆氏は、県外産黒曜石があまりにも微量であることから、遠い産地から野尻湖に到達するまでにはいくつもの地域の集団が介在したと推定しました（谷2005）。わずかな量とはいえ、他地域の集団との交流の在り方を探る重要な結果を示してくれました。

黒曜石産地の違いから遺跡の性格を探る

野尻湖遺跡群では石器・石片の集中部が環状にめぐる大規模な3万年前の環状のムラが数多く発見されました。日向林（ひなたばやし）B遺跡と貫ノ木（かんのき）遺跡第3地点に代表されます。このふたつの環状のムラの性格付けに黒曜石産地推定分析が役立ちました。ふたつの環状のムラは対照的な黒曜石のあり方で、日向林Bでは産地が長和町和田・鷹山群で占められるのに対し、貫ノ木では下諏訪町の諏訪星が台群、長和町の上記群、茅野市蓼科群と産地が分散しました。この黒曜石のあり方を推定のひとつの根拠として、日向林Bは一つの産地の黒曜石をその場で分け合い、短期間に形成されたムラであったと推定、貫ノ木は複数産地がみられたことから長期間に多くの集団が訪れて形成されたムラと推定されました（大竹2007）。

このように「黒曜石産地推定分析」は、旧石器時代人の生活のあり方に迫ることができる重要な研究方法のひとつです。

＜参考文献＞

谷和隆2005「長野県にもたらされた黒曜石」『長野県立歴史館研究紀要』第11号

大竹憲昭2007「ふたつの環状ブロック群」『長野県立歴史館研究紀要』第13号

文献史料をよむ

「皇国地誌」の編さんと筑摩県

「皇国地誌」の編さん

「皇国地誌」は、明治政府が国土把握には地誌編さんが必要と考え、計画し、未完に終わった政府による地誌編さん事業です。

写真①
太政官達第97号（当館）

写真①は、『旧筑摩県布達留』（当館蔵）という簿冊のなかの文書の一部です。政府が筑摩県に原稿の提出を指示したものです。「『皇国地誌』編集のひな形と編集方法を決めたので、それにあわせて詳しく調査して（原稿を）地理寮へ提出するように　明治八年六月五日　太政大臣三條実美」と書かれています。明治時代の太政官制における最高職の人物の名前が見られます。当時の政府が、この事業をなんとしてでも完遂したいと考えていたことが想像されます。

しかし、明治5年（1872）頃から始められた事業は難航し、紆余曲折の後、明治18年（1885）に打ち切られ、明治26年（1893）に事業廃止となっています。

「皇国地誌」は、刊行されませんでしたが、残存する原稿や控えは貴重な史料となっています。

「皇国地誌」は、「村誌」と「郡誌」で構成されており、「村誌」原稿は町村が作成して府県を通じて政府へ、「郡誌」原稿は府県が作成して政府へ提出することになっていました。県に提出された原稿の控えは、当初県庁舎で保管され、その後、県立図書館を経て、現在、当館で保管しています。

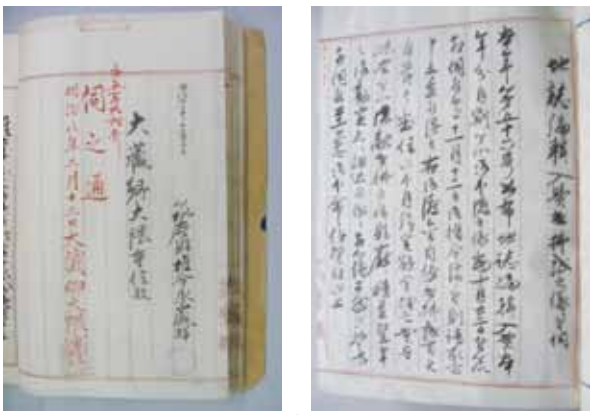
「村誌」原稿は、78冊の簿冊（数村から十数村分をまとめたもの）にまとめられており、昭和11年（1936）に県が発刊した『長野県町村誌』は、この原稿を中心に編集されたものです。

また、「皇国地誌」には、地図が添えられており、この地図も、貴重な史料です。

明治政府と筑摩県のやりとり

明治7年（1874）に、政府は地誌編集費用として一府県あたり年額700円（現在の1,400万円程度）を支給することにしました。

写真②は、『官省指令之部』（当館蔵）という簿冊につづられた文書の一部です。明治7年12月、筑摩県権令永山盛輝が大蔵卿大隈重信に伺ったものです。「政府から地誌編集費用を支給されたが、



写真②　地誌編輯入費遣払残之儀ニ付伺（当館）

残金があった時は他の費用の支払いにあてたいので、（返金せずに）翌年の会計に組み入れるものと思っているがそれでよろしいか、至急指示していただきたい」というもので、翌年2月、政府は大隈名で「伺之通（でよい）」と答えています。「他の費用」とは、政府が任命した県の役人の給与や警察予算等で、これらも別に政府から支給されていました。

県の自主財源がなかった当時、政府から支給された費用が県の基本収入となっており、県財政が政府に委ねられていたことが分かります。

INFORMATION
インフォメーション

■2016年（平成28）

3月～6月の行事予定

3月

休館日
1・2
7・14
22・28

講座・イベント

やさしい信濃の歴史講座
「大地に刻まれた信濃の歴史」

第7回　3／5（土）
「何が通った？
　　安曇野をつなぐ道」
（安曇野市豊科郷土博物館・矢口友美氏）

「女たちは善光寺をめざす
　－江戸時代の旅と宿場－」
（青木隆幸）

親子映画会
13:30～15:00
3/19（土）・20（日）・23（水）・24（木）

速　報　展

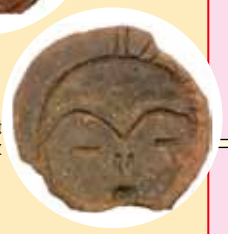
「長野県の遺跡発掘2016」

3／12（土）～6／26（日）

■講演会・遺跡報告会
4/23（土）　13:30～15:40
＜遺跡報告会＞
「長野女子高校校庭遺跡」
「栄村ひんご遺跡」
報告者：各遺跡発掘担当者

＜講演会＞
「土偶ってなんだろう？」
講師：三上 徹也 氏
（長野県考古学会員）

土偶
縄文時代中期、塩尻市平出遺跡、塩尻市教育委員会提供



土偶
縄文時代中期、塩尻市平出遺跡、塩尻市教育委員会提供

4月

休館日
4・11
18・25

5月

休館日
9・16
23・30

歴史館でこどもの日
5/4（水）、5（木）

古文書講座
初級　第1回
　A:6/5（日）　B:6/16（木）

中級　第1回
　A:6/4（土）　B:6/16（木）

上級
　第1回　5/28（土）
　第2回　6/25（土）

6月

休館日
6・13
20・27

行事アルバム

秋季企画展「樹木と人の交渉史」イベント
「樹木観察会とクラフト作り」
　10月24日、NPO法人やまぼうし自然学校の協力を得て、森将軍塚古墳までの樹木観察と、シカ角やドングリなどを使ったクラフト作りを行いました。大人は樹木の説明に聞き入り、子どもたちはドングリ拾いに夢中でした。クラフト作りでは手作りのオリジナルストラップに満足していただき、樹木と触れあう半日となりました。

やさしい信濃の歴史講座
　12月12日、今年度の「やさしい信濃の歴史講座」がはじまりました。「大地に刻まれた信濃の歴史」と題して、長野県内の史跡や建物などを取り上げ、わかりやすく紹介します。３月まで全７回の講座ですが、お好きな内容のみの参加も大歓迎です。

冬季展「地図の『明治維新』」イベント　「地図見学会」
　1月10日と30日、展示室では広げられない大判の地図を地区別に公開する見学会を行いました。「東北信編」と「中信編」の両日あわせて101名の参加者があり、じっくりと地図をご覧いただくことができました。

表紙の写真の解説

栄村ひんご遺跡出土　縄文時代土偶
（長野県埋蔵文化財センター提供）
　ひんご遺跡の発掘調査では、縄文時代中期から後期にかけての集落跡が確認されました。縄文時代の遺跡では栄村初の本格的発掘調査で、村の歴史をひも解く上で貴重な例となりそうです。「長野県の遺跡発掘2016」では、この土偶をはじめ、県内各地の発掘成果を展示します。

長野県立歴史館たより　春号　vol.86
2016年（平成28）2月17日発行
編集・発行　　長野県立歴史館

〒387-0007　千曲市屋代260-6
電話　026-274-2000（代）　FAX　026-274-3996
E-mail　rekishikan@pref.nagano.lg.jp
ホームページ　http://www.npmh.net/

印刷　富士印刷株式会社